

2017年10月28日 寿谷一先生 三回忌・追悼講演会

『 顎機能障害に対する寿谷理論の臨床実践報告 』

松岡 力 (愛知県一宮市 開業)

総合歯科治療における、考慮すべき3要素(顎関節と神経筋機構および咬合[歯及び歯周組織]の調和)が、歯科界で掲げられて久しい。しかし、机上で示されるこの3要素の理想論は、置換治療が主体の対症療法的な治療を中心とする、臨床歯科現場との懸隔は歪めない。ことに顎機能障害を有する治療の多くは、顎生理学の有識者達による、偽関節治療をコンセンサスとするバイアスにより、原因除去療法を行った上で対症療法を行うという医療の本分が、成就されない潮流も歪めない。

我々が研鑽してきた実践顎生理学(Practical Gnathology Institute)は、生態系に調和した咬合の確立を目指すものである。そして、総合歯科治療においては、個々の症状と所見および徴候から得られる原因因子を解明し、順序だてた治療計画のもとで、先に述べた医療の本分によって、顎口腔系の適切な生理的機能を獲得することが主体である。これは実践顎生理学会館の建学者である寿谷一と、寿谷理論を継承している西川洋二により、難治性と判断された顎機能障害症例への治療例が多く示されており、そのどれもが同分野の知見ある臨床家の追随を許さぬほどの口腔機能改善の様相と、すばらしい予後を呈しており、驚愕と感銘を我々にもたらした。そして、寿谷らのような卓越した学術をもつ者から我々は、理路整然とした理論を研鑽することによって、日々、実践意欲を掻き立てられている。

そこで今回は、実践顎生理学にもとづいた臨床症例を二例報告する。一例目は、咬合の齟齬を擁護する生体の許容範囲が、全身的背景や局所的因子などの様々な要因によって、縮小されたことにより、下顎の動的運動がアボイダンスパターンを呈し、その結果、不定愁訴を伴う顎機能障害が惹起されたと思われる事例に対して、原因除去後、咬合位を改善し、顎機能運動を考慮した咬合治療を行った。二例目は、ストレス性の過度のブラキシズムによる一次性咬合性外傷から、顎機能障害を発症したと思われる事例に対して、機能回復を図ったのち、顎頭位を考慮した咬合治療を行った。症例を通じて、次世代が継ぐべき実践顎生理学を反映した治療であったか、皆と供覧することで再考してみたい。